

近畿大学九州短期大学周辺の野鳥たち — 幼児教育での身近な鳥相の利用に向けて —

高木 義栄 林 幸治

Birds around Kyushu Junior College of Kinki University — To Use Avifauna of Surrounding Environment in Early Childhood Education —

Yoshihide Takaki Kooji Hayashi

Abstract

As the results of 20 times of line transect censuses, 37 avian species were recorded in the area around Kyushu Junior College of Kinki University. In the middle basin of Ongagawa River, we observed the waterfowls such as herons and the Spotbill Duck, the grassland birds like the Siberian Meadow Bunting and the Oriental Great Reed Warbler, or valuable species like the Osprey and the Common Kingfisher. On the other hand, the forest birds such as the Japanese Pygmy Woodpecker and the Japanese Bush Warbler, *Paridae* were found around Gokokujin Park. Birds being urbanized like crows and the Tree Sparrow, or the Barn Swallow were observed in both areas. The species seemed to drop in during migration, such as the Marsh Sandpiper and the Grey-spotted Flycatcher, or the Brown Flycatcher, were also recorded, this suggests that the study areas are migratory stopover of the migratory birds. These results show that the area around Kyushu Junior College of Kinki University has a great variety of avifauna. It is useful for early childhood education to use such an abundant avifauna after having done the laborer such as the observing with window shade and the monitoring of the bird table.

Key words: avifauna, line transect census, middle basin of Ongagawa River, Gokokujin Park, early childhood education

はじめに

都市化の進行などにより、戸外で自然と触れ合う機会が減少し、子供の成長に影響が及ぼされる懸念が指摘されて久しい。幼児期の環境教育の中心は自然体験であり、幼稚園教育要領の

「環境」領域では、「幼児期において自然の持つ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができる工夫をすること」が示されている¹⁾。

しかし、自然の1つである野鳥に関しては取り扱いが弱く、「環境」領域に関する教科書でも飼育を除き、ほとんど扱われていないのが現状である^{2), 3)}。野鳥は、その形態（羽色、くちばし、サイズ）や行動などが極めて多様であり、比較による発見を導きやすく、色彩の豊かさは幼児の感受性を刺激するのに最適である。このような好適な材料としての野鳥を幼児教育において無視することは極めて残念なことである。

そこで、野鳥を幼児教育において利用する工夫を探るため、まずは身近にどのような種類の野鳥が、どのくらい見られるのかを調べるため、近畿大学九州短期大学周辺地域の鳥相調査を行った。

方法

調査は、福岡県飯塚市菰田東に所在する近畿大学九州短期大学の約 600 m 東を流れる遠賀川中流域および約 600 m 南東に位置する五穀神公園周辺の 2 地域で、2012 年 5 月中旬～10 月 1 日の間に計 20 回のラインセンサスを行った。また、10 月 16 日午後 2 時ごろに遠賀川中流域で予備観察を 1 時間ほど実施した。

調査を行った遠賀川中流域の兩岸は、チガヤやヨシなどが生い茂る幅約 43 m の草原となっており（図 1 - a ～ l）、所々に取水口が点在し（図 1 - d）、部分的に樹木が生えている所もある（図 1 - e, f, g）。川は 4 か所で蛇行しており、3 か所に橋が架かり（図 1 - b, c）、福北ゆたか線の鉄橋が架かっている（図 1 - k, l）。また、東岸は水田や用水路などに接し、西岸は車道を隔てて住宅や商店、小学校と接している。

五穀神公園の南は国道 201 号線、北と南西は市営住宅地と接し、約 200 m 北には両側を幅約 40 m 前後の雑木林で囲まれた墓地がある。公園はサクラなどの落葉樹やシイなどの常緑樹の混在した丘で、北西部に小道に囲まれた頂上部、中央部に遊具が設置されたスペース、南東部に約 0.6 ha ほどの空き地がある。北北西と東、北西、南の 4 か所に出入り口があり、一部が舗装された小道でそれぞれつながっている。

ラインセンサスは、遠賀川中流域 11 回および五穀神公園 9 回、午前 10 時前後あるいは午後 2 時前後に 1 回あたり約 2 時間行った（午前 12 回、午後 8 回）。遠賀川中流域では、葬祭場から東岸を下流方向、次いで嘉麻川橋を渡って西岸を逆方向に行った光樹橋までの間を、常に川面が見えるように車道と川岸の草地を行き来する経路を定め、その長さは約 4.6 km であった。五穀神公園周辺では、近畿大学九州短期大学正門前を出発点として菰田市営住宅南にある住宅地を周り、北北西の出入り口から公園内に入り、公園東の出入り口から一旦外に出て外周を 201 号線沿い進み、南出入り口から公園内に戻って北西出入り口へ、次いで近短大方向へ進んで近短大南を横断して墓地へ入り、墓地内を縦断する経路を取り、その長さは約 4.0 km で

あった。

記録方法は、経路から 25 m 離れた経路に平行な線を境界とし、協会の内外に出現する鳥を記録する 2 ベルト法とした⁴⁾。記録は経路の両側で行った。鳥の判別は双眼鏡により行い、一部はデジタルカメラで撮影して後日判別した。調査者が気づく前に飛び去った場合や、判別前に飛び去った場合はカウントしなかった。また、写真で種がはっきり判別できなかったものはデータから除外した。

記録種数の解析は調査地域別に行い、全調査期間の合計での比較の他に、5・6 月を「初夏」、7・8 月を「盛夏」、9 月（10 月 1 日含む）を「秋」として季節間の比較も行った。

結果と考察

◆地域間での記録種数の比較

両地域で記録された種数は、合計で 37 種であった。遠賀川中流域で記録された種数は、29 種（記録された全種数の約 78 %）であった。一方、五穀神公園周辺で記録された種数は、18 種（記録された全種数の約 49 %）であった。このうち、両地域で共通する種は 10 種で、これは全記録種数の約 27 % に相当した。一方の地域でのみ記録された種が多いのは、特定の環境にのみ生息する種が多かったためである。また、五穀神公園周辺で記録種数が少ないのは、特に 7・8 月に林や藪の葉密度が高く、観察や発見が難しかった影響があると思われる。

ラインセンサス 1 回あたりの記録種数（平均±標準偏差）は、遠賀川中流域で 14.6 ± 3.0 種（ $n = 11$ ）、五穀神公園周辺で 7.0 ± 1.8 種（ $n = 9$ ）となり、遠賀川中流域の方での記録種数が有意に多かった（Mann-Whitney U -test、 $U_{11,9} = 3.5$ 、 $P = 0.0004$ ）。また、季節別では、初夏に遠賀川中流域で 15.8 ± 2.2 種（ $n = 4$ ）、五穀神公園周辺で 7.0 ± 2.6 種（ $n = 3$ ）、盛夏に遠賀川中流域で 13.0 ± 4.2 種（ $n = 4$ ）、五穀神公園周辺で 5.5 ± 0.7 種（ $n = 2$ ）、秋に遠賀川中流域で 15.3 ± 1.5 種（ $n = 3$ ）、五穀神公園周辺で 7.8 ± 1.3 種（ $n = 4$ ）となった。いずれの季節でも遠賀川中流域の方の記録種数が多かったが、盛夏のみ有意差はなかった（Mann-Whitney U -test、初夏： $U_{4,3} = 0$ 、 $P = 0.034$ 、盛夏： $U_{4,2} = 0$ 、 $P = 0.064$ 、秋： $U_{3,4} = 0$ 、 $P = 0.032$ ）。調査地域間での記録種数の差は、遠賀川中流域では川面や砂州で採餌する種が多いのに対して五穀神公園周辺では林内や藪で活動する種が多く、それぞれの場所での発見のしやすさの違いによるものと考えられる。

また、両地域とも季節による記録種数の有意な変動は見られなかった（Kruskal-Wallis 検定、遠賀川中流域： $H = 1.37$ 、 $P = 0.50$ 、五穀神公園周辺： $H = 1.99$ 、 $P = 0.37$ ）。このことは、季節によって記録種の一部の構成は変化したものの、どちらの地域でも大部分の種が季節を通して出現していたことを示す。

◆遠賀川中流域での記録種

季節を通して 3 種類のサギ（アオサギ、ダイサギ、コサギ）やカルガモ、コチドリ、セグロセキレイといった開けた環境（川面や砂州）で採餌する種が高頻度で出現した（表 1, 2, 3）。

アマサギは、前述のサギ3種と異なり、夏鳥である上に水田や放牧地などで採餌し⁵⁾、川での採餌はほとんど行わない。よって、初夏に川東岸に接する水田で1回観察されたのみであった(表1)。ゴイサギは盛夏に、カワウは秋に各々1日のみ観察された(表2, 3)。生態的にはもっと出現してもおかしくないが、別の場所に本来の活動場所があり偶然飛来した可能性がある。ハクセキレイは生態的にセグロセキレイに似るが、2回しか記録されず(8月7日のセンサスでは調査範囲外で1回観察)、本調査地ではもともとの生息数が少ないのかもしれない。

ホオジロやオオヨシキリは川岸の草原に高頻度で出現した。これらの種が活動するのはよく茂ったヨシ原内なので通常は観察困難だが、頻繁に草木の上端や近くの電線で縄張り主張のためのさえずりを行う⁶⁾ので姿を見かけやすい。また草原内でも特徴のある声をよく出すので存在を感知しやすく、高い記録頻度・出現率につながった(表1, 2, 3)。一方、セッカやヒバリ、カワラヒワも同様の生態を示すが、ホオジロ・オオヨシキリと比べると、観察しやすい場所への出現が少なかったため、記録頻度および出現率が低くなったと思われる。あるいは、種の判別前に飛び去った個体の多くは、これらの種だった可能性がある。なお、これら3種は10月の予備観察では確認されている。

スズメやドバト、ハシボソガラスといった都市部でもよく見かける種も季節を通して高頻度で出現した(表1, 2, 3)。これらの種は群れていることが多く、砂州で採餌を行っていたほか、スズメは砂浴びや水浴びに訪れていた。単独だがキジバトも初夏以外に高頻度で出現し(表2, 3)、川近くの電柱や電線に止まっている姿が何度も観察された。カラス類では、ハシボソガラスの記録頻度・出現率がともにハシボソガラスより低く、これらの2種はメインの活動場所を違えているのかもしれない。ムクドリも都市部でよく見かけるが、本調査では調査範囲外の休耕田や空き地にて集団で採餌していることが多く、川の方へはたまに来る程度であった。ツバメは川の上空で空中採餌を行い、繁殖終了後は渡り前まで川のヨシ原に集団で就眠する^{7), 8)}。このため、調査期間を通して比較的頻繁に記録された(表1, 2, 3)。

カワセミは、川の護岸などの影響で数が減少している地域もある種である。本調査では秋に2回記録されているだけだが(表3)、縄張り性が強く⁹⁾、秋のみ別の場所から飛来したとは考えにくい。夏の間はヨシなどが高く生い茂っていたため、カワセミがとまることの多い川べりの樹木や石が見にくかったため、存在に気付かなかった可能性がある。予備観察では2羽が観察された。猛禽類では、全国的によく見かけるトビのほかにミサゴが記録された(表1, 3)。ミサゴは世界的に減少著しい種で¹⁰⁾、日本では準絶滅危惧種に指定されている¹¹⁾。習性的に決まった時間および場所にいることが多いが、盛夏の間は出現しなかった(表2)。繁殖巣が別の離れた場所にあり、この間は本調査地に訪れなかったのかもしれない。

ササゴイは夏鳥、コアオアシギは旅鳥なので、特定の時期にのみ出現したと思われる(表2, 3)。モズは昆虫食だが魚類やカエルも捕り¹²⁾、この地域での記録頻度および出現率が高くなってもおかしくない。しかし、今回は記録1回のみだったことから(表3)、ハクセキレイと同じく本調査地では生息数が少ないと考えられる(ただし、予備観察では出現した)。キジ(雌雄ともに確認)は、本来この調査地では見られないはずの種である。もともとの生息地か

ら移動してきた可能性も全くないとは言えないが、脱柵個体あるいは人の手による放鳥個体である可能性の方が高いように思われる。

遠賀川中流域は、サギ類やカルガモなど一般的な水鳥に加え、ホオジロやオオヨシキリなどの草原に生息する種やミサゴやカワセミなどの貴重な種を含む、多様な鳥相を有していることがわかった。このように多様な鳥が活動している場所が身近にあることは教育的にも有意義であろう。

◆五穀神公園周辺での記録種

林や藪に生息する種に加え、これらの環境を休息場所として利用する種が記録された（表1, 2, 3）。しかし、多くの樹木の葉に覆われた、観察しにくい環境であるため、記録頻度が高かったのはハシブトガラスやキジバトといった中大型の種やヒヨドリやスズメといった群れで活動することが多い種であった。どの季節もハシブトガラスの出現が目立って多く、遠賀川中流域とは逆に記録頻度および出現率はハシボソガラスより高かった。ムクドリは秋に1日のみ観察された（表3）。この種にとって、公園周辺は近くの休耕田のような開けた場所への中継地点となっているのかもしれない。

低頻度だが季節を通して記録されたコゲラ（表1, 2, 3）や7月以降に観察されたメジロ（表2, 3）、秋にのみ出現したシジュウカラおよびヤマガラ（表3）は、生態的観点からすると記録された以上に多く生息していると考えられ、活動場所の観察しにくさが低い記録頻度および出現率に反映したと思われる。一方、ウグイスも藪を潜行する性質¹³⁾から同様のことが言えるが、繁殖期には特徴的なさえずりを頻繁に行う¹⁴⁾ため、声による存在確認がやりやすく初夏での高出現率につながった（表1）。この種は、繁殖期以後には特徴的なさえずりを出さず、山地から低地へと移動するので、7月以降の出現がなくなると考えられる（表2, 3）。なお、シジュウカラやヤマガラは、他の種と冬に混群を形成することが知られている^{15), 16)}ので、11月以降に調査を行えば、これらの種の出現率が高くなることに加えて未記録の種が観察されることが期待される。

ホオジロとカワラヒワは、遠賀川中流域での出現の方が多く、公園周辺には移動中の休息地として訪れたと思われる。ツバメに関しても、通常の採餌場所が川であることから、巣と採餌場所への行き来の途中の個体が記録されたと考えられる。ただし、初夏のこの地域のセンサス3回のうち、6月7日に記録したツバメは巣立ちビナであり、木の枝での休息によるものであった。

トビの出現2回は（表1, 3）、公園と墓地の間の上空と近畿大学九州短期大学西側上空を旋回していたものだが、いずれも1回ずつの記録なので、メインの活動場所からは離れていた可能性がある。モズの記録は1回のみと少なく（表3）、遠賀川中流域の場合と同様に生息数の少なさによるものと考えられる。コサメビタキは夏鳥、エゾビタキは旅鳥で、いずれも渡りの途中に立ち寄った個体が記録されたと考えられる（表3）。遠賀川中流域では同じく旅鳥のコアオアシシギが観察されており、今回の調査地全体が様々な種の中継地点となっている

のかもしれない。

五穀神公園周辺の鳥相はスズメやハシブトガラスなどを中心とした都市型の種構成と言えるが、一方でコゲラやウグイス、ヤマガラ、エゾビタキなど山野の鳥種も含まれ、都市部では見られない鳥を身近で見ることができる貴重な場所であることがわかった。

まとめ

今回の調査で、近畿大学九州短期大学周辺地域は多様な鳥相を有していることがわかった。スズメやカラス、ハトなどの都市部でも見られる種に加え、サギ類やカルガモなどの水鳥、トビなどの猛禽類、ホオジロやヒバリ、オオヨシキリなどの草原性の鳥、コゲラやウグイス、シジュウカラなどの森林性の鳥といった様々な植生に生息する野鳥が観察できた。また、カワセミやミサゴなどの希少種や、エゾビタキやコアオアシシギなどの特定の時期にしか観察できない旅鳥も確認され、今回の調査地域全体が多種多様な野鳥を楽しめる貴重な場所であるといえる。

幼児教育において、このような多様な鳥相を積極的に利用することは、幼児の心身の発達を促し、好奇心・探究心を育て、感受性を豊かにするのに役立つと思われる。しかし、今回の調査で確認された種の多くは、野生種であるため人に対する警戒心が非常に強い。近づいただけでなく、人の声や足音などに対しても反応して飛び去ってしまうことが調査中も度々あり、単に幼児を帯同して鳥のいる場所に赴くだけでは、まともに姿を観察することすら難しい。そこで、幼児に観察の機会を与えるための工夫が必要となる。

確認された野鳥のうち、ツバメに関しては特別な工夫は必要ないだろう。都市部で活動・営巣することが多く、巣の発見も容易なので産卵から巣立ちまでを比較的たやすく観察できる⁸⁾。ただし、あまりにも巣の近くで頻繁に観察すると、特に産卵・抱卵期においては巣を放棄する可能性が高くなる。適度な距離から静かに観察する注意が必要である。

カラスやハト、サギ類、ミサゴ、カルガモはサイズが大きく、開けた場所で採餌あるいは休息することが多いので、適度に離れた場所にプロミナを設置するだけで、形態や採餌の様子を十分観察できるだろう。また、手作りの野鳥観察用ブラインド（周囲に生えている草で覆ったダンボールなど）の中から観察するとより確実に観察できる。ハシブトとハシボソのカラス2種、キジバトとドバト、サギ3種（アオサギ、ダイサギ、コサギ）は、羽色やくちばし、行動などの違いが明確でわかりやすく、比較による発見を導きやすい。ミサゴは、トビとの違いがはっきりしているし、希少な種なので見る価値は高い。カルガモは5月ごろに観察すれば、多くのヒナを連れている姿を見ることができ、情操教育の一環としても利用できる。

スズメやカワラヒワ、ホオジロ、シジュウカラ、ヤマガラ、メジロはサイズが小さく、動きが早く、藪や林、草原内での活動が多いため、上述の方法では詳細な観察は不可能である。しかし、特に冬季において群れをつくる傾向があり、基本的に種子や果実を餌としているため、餌台を設置して餌となる種子や果実を定期的に供給して餌台に慣れさせれば、モニターあるいは窓からの目視（窓に新聞紙などを貼り、一部分にだけ観察できる隙間を空ける）による観察

は可能であると考えられる。場合によっては、コガラやエナガなど、今回の調査では未記録の種も観察できるかもしれない。筆者らは、今冬にも附属幼稚園裏庭における餌台の設置および飛来種の確認、園児の反応の記録などを実施する予定である。

その他の種、特にセキレイ類やモズ、セッカなどの昆虫食の鳥は、サイズが小さい上に餌台に誘引することもできないので、上述の2種類の方法では観察できない。可能性としては、巣を見つけたうえでのモニタリングがあるが、巣発見の困難さや巣を放棄される可能性の大きさといった問題が多い。また、録画したビデオ映像の視聴では市販のビデオ鑑賞とあまり変わらず、他に園児に提供できる材料は巣立った後の実物の巣ぐらいである。これらの野鳥を幼児教育に利用するためには、さらなる工夫が必要だろう。

参考文献

- (1) 文部科学省 (2008) 『幼稚園教育要領』 フレーベル館
- (2) 田尻由美子・無藤隆編 (2006) 『保育内容 子どもと環境－基本と実践事例－』 同文書院
- (3) 柴崎正行・若月芳浩編 (2009) 『最新保育講座9 保育内容「環境」』 ミネルヴァ書房
- (4) Bibby CJ, Burgess ND, Hill DA & Mustoe SH (2000) 『Bird census techniques, Second edition』 Academic Press, London
- (5) 環境庁 (1981) 『日本産鳥類の繁殖分布』 大蔵省印刷局
- (6) 山岸哲 (1970) 「ホオジロの繁殖期の生活について」 『山階鳥類研究所研究報告』 6 (1/2) 103 - 130 頁
- (7) 水野寿彦・岸博幸 (1957) 「葦原における燕集団の継続観察」 『野鳥』 22 号 5 - 12 頁
- (8) 廉隅楼雄・松良俊明 (1994) 「京都市南部におけるツバメの営巣と集団ねぐらの観察」 『京都教育大学環境教育研究年報』 第2号 73 - 81 頁
- (9) 叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄 (1998) 『山溪ハンディ図鑑7 日本の野鳥』 山と溪谷社
- (10) 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男 (1998) 『図鑑日本のワシタカ類』 第2版 文一総合出版
- (11) 環境省 (2002) 『改訂日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－2 鳥類』 自然環境研究センター
- (12) 高野伸二 (2007) 『フィールドガイド日本の野鳥 増補改訂版』 230 - 231 頁 日本野鳥の会
- (13) 清棲幸保 (1978) 『増補改訂版日本鳥類大図鑑 I』 講談社
- (14) 羽田健三・岡部剛士 (1970) 「ウグイスの生活史に関する研究 1. 繁殖生活」 『山階鳥類研究所研究報告』 6 (1/2) 131 - 140 頁
- (15) Snow DW (1954) 「Trends in geographical variation in palaearctic members of the genus *Parus*」 『Evolution』 8 19 - 28 頁
- (16) 小笠原嵩 (1970) 「東北大学植物園におけるシジュウカラ科鳥類の混合群の解析 II. 採餌垂直分布及び種間関係」 『山階鳥類研究所研究報告』 6 (1/2) 170 - 178 頁



図 1 - a 鶴三緒橋南側



図 1 - b 鶴三緒橋北側



図 1 - c 光樹橋北側



図 1 - d 鶴三緒ポンプ場前その 1



図 1 - e 鶴三緒ポンプ場前その 2



図 1 - f 三和総合食品斜め前



図 1 - g 菰田小南側



図 1 - h 学頭排水場前



図 1 - i 菰田小北側



図 1 - j 菰田小交差点前



図 1 - k 福北ゆたか線鉄橋南側



図 1 - l 嘉麻川橋南側



図 2 - a 五穀神公園北北西口



図 2 - b 公園北北西坂道その 1



図 2 - c 公園北北西坂道その 2



図 2 - d 公園北北西坂道曲がり角



図 2 - e 公園北北西坂道その 3



図 2 - f 頂上部小道北側



図 2 - g 頂上部小道西側



図 2 - h 頂上部小道南側



図 2 - i 遊具スペース前



図 2 - j 公園南東部空き地入口



図 2 - k 公園東部脇道



図 2 - l 公園東部脇道奥の階段



図 2 - m 公園東口



図 2 - n 公園西部坂道入口



図 2 - o 公園西部坂道その 1



図 2 - p 公園西部坂道その 1



図 2 - q 公園西部坂道その 3



図 2 - r 公園北西口

表 1. 近畿大学九州短期大学周辺 2 地域におけるセンサスで記録された鳥種のリスト (初夏)

種名	遠賀川中流域		五穀神公園周辺	
	記録頻度	出現率 (%)	記録頻度	出現率 (%)
コゲラ	0	0	1	33.3
ウグイス	0	0	3	100
ヒヨドリ	0	0	5	100
ハクセキレイ	1	25	0	0
セッカ	1	25	0	0
キジバト	1	25	3	66.7
アマサギ	1	25	0	0
キジ	1	25	0	0
ヒバリ	2	50	0	0
ムクドリ	2	50	0	0
ミサゴ	2	50	0	0
ドバト	3	75	0	0
ハシブトガラス	3	75	7	100
トビ	3	50	1	33.3
スズメ	5	100	2	66.7
セグロセキレイ	5	75	0	0
ツバメ	5	100	4	100
カワラヒワ	6	75	1	33.3
ハシボソガラス	6	75	1	33.3
コサギ	7	100	0	0
コチドリ	8	100	0	0
ダイサギ	8	75	0	0
カルガモ	9	100	0	0
アオサギ	11	100	0	0
ホオジロ	15	100	2	33.3
オオヨシキリ	16	100	0	0
記録された種数	23		11	

表 2. 近畿大学九州短期大学周辺 2 地域におけるセンサスで記録された鳥種のリスト (盛夏)

種名	遠賀川中流域		五穀神公園周辺	
	記録頻度	出現率 (%)	記録頻度	出現率 (%)
コゲラ	0	0	3	50
ヒヨドリ	0	0	1	50
ハクセキレイ	0	0	0	0
キジバト	7	50	1	50
キジ	2	50	0	0
ヒバリ	4	50	0	0
ムクドリ	0	0	0	0
ミサゴ	0	0	0	0
ドバト	9	75	0	0
ハシブトガラス	2	50	8	100
トビ	3	50	0	0
スズメ	8	100	8	100
セグロセキレイ	4	75	0	0
ツバメ	3	50	0	0
カワラヒワ	3	25	1	50
ハシボソガラス	9	100	1	50
コサギ	13	100	0	0
コチドリ	3	50	0	0
ダイサギ	11	75	0	0
カルガモ	11	75	0	0
アオサギ	15	100	0	0
ホオジロ	11	75	0	0
オオヨシキリ	2	50	0	0
ゴイサギ	1	25	0	0
ササゴイ	4	75	0	0
メジロ	0	0	2	50
記録された種数	20		8	

表3. 近畿大学九州短期大学周辺2地域におけるセンサスで記録された鳥種のリスト（秋）

種名	遠賀川中流域		五穀神公園周辺	
	記録頻度	出現率（％）	記録頻度	出現率（％）
コゲラ	0	0	1	25
ヒヨドリ	0	0	8	25
ハクセキレイ	1	33.3	0	0
キジバト	18	100	10	100
キジ	1	33.3	0	0
ムクドリ	3	66.7	2	25
ミサゴ	2	66.7	0	0
ドバト	3	100	0	0
ハシブトガラス	2	66.7	19	100
トビ	0	0	1	25
スズメ	7	100	5	75
セグロセキレイ	5	100	0	0
ツバメ	6	66.7	0	0
ハシボソガラス	6	100	7	100
コサギ	16	100	0	0
コチドリ	1	33.3	0	0
ダイサギ	9	100	0	0
カルガモ	19	100	0	0
アオサギ	20	100	0	0
ホオジロ	12	100	0	0
メジロ	0	0	3	25
シジュウカラ	0	0	5	100
ヤマガラ	0	0	3	50
モズ	1	33.3	1	25
コサメビタキ	0	0	2	50
エゾビタキ	0	0	12	50
コアオアシシギ	2	33.3	0	0
カワウ	5	33.3	0	0
カワセミ	2	66.7	0	0
記録された種数	22		14	